

## 男子サーブルで池澤2位、寺田3位 JOCジュニア・オリンピック・カップ・フェンシング

JOCジュニア・オリンピック・カップ・フェンシング大会が1月10、11日の両日、駒沢オリンピック公園総合体育館で行われた。今回は勝率の高い順から次に進めるというプール戦方式がとられ、男子サーブルで池澤春光(経営1・鳥取西工高)が2位、寺田直生(法2・埼玉栄高)が3位に入賞した。

池澤は、予選プールを順調に勝ち抜き、決勝のプールでは、近畿大の野上と大垣南高の山田に苦戦したものの、その他の相手に対しては自分のペースを守って試合を進め、2位という素晴らしい成績を飾った。

池澤、寺田ともに今後の伸びに大きな期待が出来そうだ。

(佐山美貴・文2)  
〔2月8日/ニュース専修11面〕

## 厳冬の槍ヶ岳に登頂 吹雪に道迷うも無事下山



槍ヶ岳山頂の山岳部員

山岳部の冬山合宿が北アルプスの槍ヶ岳(標高3180メートル)で12月29日から1月8日まで行われ、登頂に成功した。

登りは途中から風が強くなり苦労した場面もあったが、頂上手前になると空はすっきりと晴れて最高の景色を見ることが出来た。

下山では登りよりもさらに強い風に襲われ、降り出した雪が視界も遮りペースダウンしてしまう。一度来た道にまた戻ってしまうというアクシデントもあった。凍傷になるほどの極寒の中、無事帰還した。

吉川公一主将(法4・豊明高)は「燃料や食料の計画が甘く、ギリギリだった。また時間管理も多少ルーズになるなど、問題点もあった。冬山は登山の総合力が試されるということを痛感した」と振り返った。

(高橋奈津子・文2)  
[2月8日/ニュース専修11面]

## バスケットボール部 全日本学生優勝を祝う



1月11日、東京プリンスホテル・マグノリアホールで、連盟関係者、マスコミ関係者、大学関係者、OB・OG、部員ら約300人が出席して、全日本学生バスケットボール選手権優勝祝勝会が開かれた。

チームのテーマ曲によって選手入場から始まり、選手紹介、監督挨拶、主催者挨拶、来賓祝辞などが行われた。場内ではビデオ(試合、監督インタビューなど)が上映され、最後の校歌斉唱まで終始和やかな雰囲気だった。

[2月8日/ニュース専修11面]

人 ZOOM UP バasketボール部 青木康平 (商4)  
バスケ普及へ情熱 NBA挑戦も視野



今、日本のBasketボールを変えようとしているプレイヤーが専大にいます。青木康平である。専大は初の全日本学生選手権優勝に導き、MVPを獲得。バスケを普及させようと、3ON3大会に出場したり、ヒップホップライブの前座でボールパフォーマンスを見せたりと、既成の概念にとらわれない活動をしている青木にバスケ人生を語ってもらった。小学校3年生の時、友だちの姉に誘われたのがきっかけ。ミニバスケの監督は「何事も気合だ！」というスポ根指導であったため、根性はここで鍛えられた。福岡に敵はいなくなり「全国優勝出来るのでは？」と夢を抱くが、全国大会で初めて実力のなさを痛感する。

中学校は、名門・長丘中に入学。2年生ごろから大濠高OBの指導で、高度な技術を学ぶが、結果はベスト8。この時「このバスケでは上に通用しない」と悟るが、スカウトされ大濠高へ。厳しい練習とクラブ内の上下関係に悩み「初めてバスケを辞めようと思った」。

夢が消え、バスケを諦めていた時、観客を魅了する専大バスケを知り、進学。しかし、3年次には、実力差がないにもかかわらずスタメン落ちを経験。この納得出来ない状況が更なるウエートトレーニングへと駆り立てた。そして持ち前の負けず嫌いとはバスケへの情熱で、スタメンを奪還。夢だった全国優勝の喜びを噛み締めた。

そこで、「今の夢は？」と聞くと「日本のバスケを変えたい」と言う。「日本にバスケを根付かせるために、もっと観客を魅了し、メディアを注目させるようなバスケを目指したい」と情熱を話す。今年3月にはバスケの本場アメリカでNBAのトライアウト(入団テスト)に挑戦する予定である。

「日本のバスケを変えたい！」青木ならやるに違いない。  
(あおき・こうへい)1980年12月13日生まれ/168cm・60kg/O型/福岡大附大濠高卒  
(山室綱寛・文2)  
[2月8日/ニュース専修11面]